

## たばこの健康影響の歴史と、喫煙対策変遷について

たばこは嗜好品ですが、1950年以降の研究で指摘され、WHO（世界保健機構）、米国及び英国からは多くの喫煙勧告が出て、WHOは健康保持目的に1989年から5月31日を世界禁煙デーとし、禁煙防止策の対象者を妊婦、青少年、医療関係者等とした。

先進国中心に喫煙防止教育の充実、広告規制、たばこ包装警告表示義務付け、若年者喫煙防止対策、公的な場所の禁煙規制等各種対策が進められた。

平成14年健康増進法で学校、体育館、病院、劇場、観覧場、集会場、百貨店等多数の者が利用する施設管理者に、受動喫煙防止を義務付ける防煙対策、平成22年10月国民健康を守るため、たばこ価格が大幅に値上された。

たばこの煙には発がん性化学物質が200種を超え、喫煙者は肺・膀胱・食道がん等の種々のがん、心筋梗塞等の心疾患、慢性気管支炎や肺気腫等の閉塞性肺疾患、胃・十二指腸潰瘍等の消化器疾患、その他あらゆる疾患の危険性が増大、妊婦は、低出生体重児、早産、妊娠合併症の危険性が高まるとされる。

受動喫煙でも、喫煙者とほぼ同様の結果とされる。

当施設は職員数30数名程で、受動喫煙の社会情勢等を考慮しながら、館外に2カ所喫煙場を設置しています。